

鹿 1 4 親鹿の瞳 = = = 猪・鹿・狸より

開創の始めから、鹿とは因縁深い鳳来寺ではあったが、明治に改まったと思うと、もう馬鹿馬鹿しい鹿を弄り殺した話がある。

前にも言うた岩本院は、本堂の西方寄り、俗に大難所と呼んだ高岩壁の下にあって白木造りの立派な建物だったそうである。その岩壁の上を、毎朝きまって通る五、六匹の引鹿があった。寺男の一人が、とうからそれを知っていたが、なにぶん山内のことで、どうすることも出来ぬ。そこで生け捕りにして山内を引き出せばよいと、勝手な理屈を考えた。それである日麓の門谷に下りて、若者たちを語らって、青竹を籠目に組んで、鹿が踏み込んだら動きの取れぬような罠を仕掛けたそうである。翌朝行って見ると、十四、五貫もある雄鹿が掛かっていた。それを大勢して寄ってたかかって頸から肢に滅茶苦茶に縄を掛けた。そうして口へは馬にするような轡を嵌めてしまった。二人の男がその口を把って、大勢が後から鹿の尻を打ち打ち、引き出したそうである。そして何百段かの御坂を降って、門谷の町へ出て来た。軒ごとにそれを見せびらかしながら、正月発駒を曳くような気で、あちこち大勢の見物の中を引っ張り廻したそうである。鹿はいかにも観念したようで、ちっとも抵抗せなんだそうである。町の有力者の庄田某がさすがに見かねて、その鹿は助けてやってくれと、幾干の金包みをとらしたそうである。しかし若者たちは、その場だけ承知して、やがて村端れからふたたび山の中に引き込んで、殺して煮て食ってしまったと言う。よくよく鳳来寺も没落の凶兆が来たと語り合ったものもあったと言う。実は鳳来寺の権威も地に墜ちて、一山がひっくり返るような騒ぎの、明治四年のことだったそうである。

まるきり弄りものではなかったが、狩人の中には、生まれて間もない子鹿を罠にして、親鹿を捕るものがあった。狩人が夏山を稼げば、崖の下やナギ(山崩れ)の跡などに、滑り込んでいる子鹿を拾うことがあった。そうした時は、親鹿が近くにいることは判っているので、すぐ殺さずに、木に繫いでおいて、ぎいぎい鳴かせて親鹿を誘い出したのである。親鹿は子鹿の姿が見える間は、幾日でもそこを去らなんだ。何処かしらから、じっと見ていたのである。もし狩人がいればその目を注意しているので、こっちがそれと気づいて瞳と瞳が遇うと、すぐ遁げてしまった。それでこの獵法は、よほどの技巧を要するそうである。何度も失敗を重ねると、ついこちらも意地になって、一日ぐらいその場に寝込んで待つこともあったが、そうなっては、決して撃てるものではなかったと言うた。子が捕られれば、親が見えがくれに見守っていたが、親鹿を撃つと、子鹿がその傍を離れなんだそうである。犬でもおれば格別だが、さもない時は、親鹿を昇いで来ると、後から隋いて来たそうである。

余計なことだが、子鹿のことをやはりコボウまたはコンボウと言った。而して二歳鹿の角にまだ枝のないものを、ソロまたはソロッポウと言ったのである。